

【原著】

禁煙導入のための死亡情報活用 ～喫煙関連疾患死亡リストの構築～

森岡 聖次¹⁾ 奥田 恭久²⁾

要 旨

背景：多くの喫煙者は禁煙挑戦しようと考えているが、決断に到るきっかけがむずかしい。そこで、喫煙者への禁煙導入を促すため、著名人の死亡記事などから情報を収集し、データベースを構築し、講演会、禁煙外来での患者指導などに用いた。

方法：データ源は2003年4月以降の全国紙のほか、人生のセリムスケール等のインターネット情報を用いて収集した。死亡者が生前喫煙者であったかどうかは本人の記述や喫煙している写真を判断根拠とした。喫煙関連疾患は、加濃らの提唱した260以上の疾病リストを照合した。生没年は百科事典のほか、ウィキペディア等を参照した。啓発方法は防煙教育の場や禁煙外来等で啓発対象者の年齢、背景を考慮して、作成したリストの中から代表的な俳優（女優）、歌手、作家、学者、スポーツ選手等を紹介した。

結果：2010年7月現在で、516人（最古生年1804→最新生年1971：うち女性35人）を収集（うち日本人・東洋系は81%）した。このうち54人は現段階で死因不明であった。残る462人の職業は、作家32%、俳優（女優）17%、歌手12%が上位であった。死亡年齢は最年少31歳から最高100歳までで、この516人とは別に、喫煙歴不明の181人が喫煙関連疾患死亡者として収集されたが、現時点では生前の喫煙歴は確認されていない。死因別では、男女ともがん（男44%、女54%）、循環器疾患（男29%、女26%）、呼吸器疾患（男女とも9%）が多かった。

結論：著名人の死亡は話題性も高く、たばこ病を身近なものとして認識させ、禁煙挑戦を促進するうえで有用であると示唆された。新聞報道などでは、可能な限り死因と喫煙歴を掲載することが期待された。また禁煙効果の啓発のためには、禁煙した著名人自身が禁煙啓発する必要があると考えられた。

キーワード：データベース 喫煙関連疾患 著名人 禁煙導入

結 言

多くの新聞読者は、訃報欄に注目しているが、その人物が喫煙者であったかどうか、死因は喫煙関連疾患であったかどうか、明示されていない場合も多い。人間は必ず死ぬ生命体であり、著者らは、その死亡情報はプライバシー問題が許せば有効活用されるべきである、と考えている。調査年次によりばらつきはあるが、喫煙者の

4割程度¹⁾、本数を減らしたいと思う者を含めれば6割以上は禁煙したい²⁾とっており、喫煙者は禁煙挑戦へのきっかけを求めている。

一般人の死に比較して著名人・有名人の死や傷病が住民に与えるインパクトは大きい。例えば、スキンヘッドの個性派俳優として風靡したYul Brynner（1920-1985）は喫煙者であったが、自身の肺がん発症を生前公表して、死後には“Do not smoke”との禁煙キャンペーン映像が公開された。日本でも漫才師コロムビア・ライト

1) 南和歌山医療センター 禁煙外来
2) 和歌山工業高校 産業デザイン科

責任者連絡先：森岡聖次

住所：和歌山県田辺市たきない町27-1

南和歌山医療センター 禁煙外来（〒646-9558）

電話 0739-26-7050（内線615）

(本名：鳥屋 二郎=1927-2010) は長年の喫煙によって64歳で喉頭がんを発症し声帯を摘出後、食道発声法を体得して生前精力的に禁煙啓発を行っている³⁾。

このように、喫煙関連疾患患者自身が実体験に基づき禁煙を啓発することには大きなインパクトがあり、未成年者に対する防煙教育でも効果的であることが指摘⁴⁾されている。禁煙推進の成書でも、いかに有名人がたばこ病で早死したか、紹介している例⁵⁾がある。しかしながら、常にたばこ病経験者に啓発を依頼するには制約も多い。

そこで今回、有名人の喫煙関連疾患死亡者のデータベースを構築し、禁煙推進に供したので報告する。

方 法

著名人の死亡情報は、2003年4月以降、全国紙から得た。また、人生のセイムスケール(玉川 和正(編), 2004~現在も更新中)等のインターネット情報⁶⁾も補完的に用いた。死亡者が生前喫煙者であったかどうかについては、本人の記述、生前の喫煙写真を判断根拠とし、たばこ病であるかどうかの判断は著者のひとり森岡が行った。喫煙関連疾患の定義は、喫煙により罹患率、死亡率の有意な上昇を認める疾病群⁷⁾を用いた。

生没年の確認は、百科事典のほかウィキペディア(<http://ja.wikipedia.org/>)などのインターネット情報も検索した。データベースには氏名(芸名)、生没年、性別、職業、死因、その他の参考情報(例えば、心筋梗塞で死亡しているが、生前肺がんでも治療歴があったなど、死因以外の喫煙関連疾患病歴の有無など)を収載した。

表 1 性別年齢階層別死亡者数

区分	男	女
総数	481(100%)	35(100%)
30-39歳	13(3)	1(3)
40-49	34(7)	6(17)
50-59	68(14)	7(20)
60-69	121(25)	10(29)
70-79	171(36)	7(20)
80-89	65(14)	3(9)
90-99	8(2)	1(3)
100歳	1(2)	0(0)

※()は総数に対する割合(%)

啓発方法は、高校生には奥田が実施しているゼロタバコ・プロジェクトの中で2005年4月以降、数回印刷媒体として紹介⁸⁾した。成人に対しては禁煙外来での禁煙導入時や一般講演会で紹介した。この際、啓発対象者の年齢、背景を考慮して、代表的な俳優、歌手、作家、学者、スポーツ選手などを紹介した。

本データベース構築には研究費を得ていない。また、既報の公表された情報のみを編集しているため、研究に対する倫理委員会の倫理的判断を求めている。

結 果

1. データベースの構築

2010年7月までに516人(男481人、女35人)の死亡情報が収集された。表1に性別年齢階層別死亡者数を示す。死亡者の生年は1804年から1971年までと約2世紀に渡っていた。死亡年齢は31歳(男性画家、ほか)から100歳(男性作家)まで分布していたが、男では70歳台が36%と最も多く、女では60歳台が29%と多かった。54人(10%)は2010年7月時点では死因不明であった。出身地域別には、男では19%が欧米など非アジア人種、女では29%がアジア出身以外であった。職業別には、男では作家(32%)、俳優(16%)、歌手(11%)が多く、女では女優(34%)、作家(26%)、歌手(23%)が多かった。また表には示していないが、これら516人以外に、喫煙関連疾患で死亡した181人を収集したが、2010年8月時点では喫煙歴不明となっているため、リストには掲載しなかった。

2. 主な死因

表2に死因別死亡数を示す。男ではがん44%、循環器疾患29%、呼吸器疾患9%の順に多く、女ではがん54%、循環器疾患26%、呼吸器疾患9%の順であった。

表3に、がん死亡数を部位別に示す。男(211人)では肺(29%)、肝(12%)、胃(10%)、咽頭・喉頭(10%)、食道(10%)の順であり、女(19人)では肺(21%)、胃(21%)、乳(11%)となっており、これら以外は9部位9人の死亡であった。

循環器疾患では、男(139人)では心不全(41%)、心筋梗塞(14%)、脳出血(14%)、腎不全(9%)の順であり、女(9人)では心不全(67%)、腎不全(22%)、心筋梗塞(11%)であった。

表2 死因別死亡者数

区分	男	女
総数	481(100%)	35(100%)
がん	211(44)	19(54)
循環器	139(29)	9(26)
呼吸器	44(9)	3(9)
消化器	27(6)	1(3)
その他	9(2)	0(0)
不明	51(11)	3(9)

※()は総数に対する割合(%)

表3 部位別がん死亡者数

区分	男	女
総数	211(100%)	19(100%)
肺	61(29)	4(21)
肝	25(12)	1(5)
胃	22(10)	4(21)
咽頭喉頭	22(10)	1(5)
食道	21(10)	0(0)
大腸	16(8)	1(5)
膵	12(6)	1(5)
乳	0(0)	2(11)
その他	32(15)	5(26)

※()は総数に対する割合(%)

呼吸器疾患では、男(44人)では肺炎(59%)、間質性肺炎(14%)、肺気腫(9%)、呼吸不全(9%)の順であり、女(3人)では間質性肺炎(67%)、肺炎(33%)であった。

これらに次ぐ死因では消化器疾患(男で死因の6%、女で3%)が観察された。また病死ではないが、寝たばこで自宅が消失して焼死した例もあった。

3. 啓発結果

高校生に対する啓発では、リストに掲載された著名人の名を挙げることで、家庭内で保護者、同胞との会話のきっかけとなり、認識共有に効果が得られたと報告された。成人に対する講演会では、参加者から「あの人も喫煙していたのか」という驚きや「たばこは確かに万病のもとになっている」との納得が得られた。これらの理解程度については、アンケートなどで確認できていない。禁煙外来での説明でも、リストを用いて著名人の喫煙歴や死因について説明することが、相談者の禁煙決断に

有用であった。

考 察

本研究は特定の集団における死亡の全数調査ではないため、一般人口との死因の傾向比較などはできない。また著名人・有名人には定義がなく、死亡した有名人を全員補足しているものではない。死因に関しては、報道されている死因が原死因⁹⁾であるかどうかは吟味できていない。さらに、生前の喫煙とたばこ病死との関連は深いと考えられるが、必ずしも個別の因果関係は確認していない。生前の喫煙状況に関しては、1日本数や喫煙年数などの情報がないため、喫煙量の推計は行えていない。本データベースの持つこれらの制約が存在していることを承知のうえで、禁煙推進啓発に活用する必要がある。

本データベースの男女比は、およそ14:1と極端に男が多かった。これは男女の喫煙率差の影響だけでなく、著名人の喫煙の公表状況の男女差にも由来していると考えられる。

喫煙者が禁煙を決断するのは、たばこ税率の引き上げ、友人、隣人の禁煙、旧知の喫煙者の疾病、死亡、自身の喫煙に伴う症状増加など、さまざまな要素がある¹⁰⁾と考えられるが、同世代の著名人の死は、禁煙意欲を高める傾向に働く¹¹⁾こともあるとの報告もある。従って、今回作成したリストにより、いかに多くの死が喫煙に関連しているかを再認識する機会を提供することに有用であると考えられる。

喫煙者の中には「自分だけは喫煙関連疾患にはかからない」といった奇妙な自信を持つ場合もあり、同年輩の著名人が喫煙関連疾患に罹患していたことを示すことは、自身の健康に対する警告にもなり、禁煙勧奨にも有用であろう。喫煙していた有名人が、禁煙したことによってどのようなメリットがあったかを自身で述べることも禁煙啓発には有用¹²⁾であると思われるが、現状では禁煙後の経緯に関する情報量はまだまだ多くない。

今回収集された情報のうち、背景要因としての職業では、男の194人(40%)は俳優、歌手など、直接声を用いる職業であり、女では21人(60%)が声を出さず職業であった。たばこが喉頭がんを含めがん発生の要因¹²⁾であり、発声を含めた呼吸機能全般に悪影響がある¹³⁾ことは明白である。そうであるにも関わらず、職業上も呼吸機

能を健全に保つべきプロフェッショナルが喫煙関連疾患によって本業（仕事）の中断を余儀なくされ、死亡に至っている現状はまことに残念であり、職能全体としての禁煙介入が必要であることを示唆している。

また今回、スポーツ選手の喫煙関連疾患死亡は男で20人、女で1人収集された。運動パフォーマンス上、喫煙が不利であることは明白¹⁴⁾であるにもかかわらず、スポーツ選手でも一定の喫煙率があることは、スポーツの本来の目的の上からも残念である。

今後は、メディアや芸術・スポーツなどに関連する多くの団体が禁煙宣言を出し、喫煙被害を減らす行動を取ることが期待される。これらのデータベースを更新するには、新聞等のメディアが死亡者の喫煙歴と病名を編集することが重要である。また今後は、有名人の喫煙者が禁煙して、コロムビア・ライト氏のように禁煙の効能を啓発することが求められる。

受動喫煙に関しては、いわゆるsecond-hand smokeだけでなく、近年は時差を伴ったthird-hand smoke（残留受動喫煙）の課題¹⁵⁾も出てきている。今回の情報収集では、受動喫煙による死亡については、充分収集できなかった。本人が生前非喫煙者であることが明確であった、喫煙関連疾患で死亡している例では、受動喫煙被害である可能性がある。受動喫煙の影響を数量として測定することは困難であるが、大規模コホート研究からは、夫が喫煙者である場合の非喫煙妻の肺がん死亡率は2倍になる¹⁶⁾¹⁷⁾ことが報告されており、健康被害は相当大きいものと考えられる。受動喫煙影響の数量化は、今後検討されるべき課題であると思われる。

また、高校生に対する防煙教育における本データベースの活用では、生徒が自分の家人に対する禁煙勧奨をする場合、具体的な人名を出して話すことには説得力があり、保護者や同胞への禁煙介入に有用であったことが示唆された。

結 語

禁煙推進に用いる目的で、著名人・有名人の喫煙関連疾患死亡に関連したデータベースを構築した。2003年以降2010年7月までに516人（男93%）の情報が収集され、死因不明は54人（10%）であった。本データベースを開示することは、一般集団における禁煙導入に有用である

と考えられた。

本研究の情報収集に関しては、渡辺文学氏（たばこ問題情報センター）からのご指導を得た。記して感謝申しあげる。本研究の要旨は第5回日本禁煙科学会学術総会（2010年、徳島市）で発表した。

文 献

- 1) 厚生労働省(編)：平成22年国民健康・栄養調査結果の概要<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000020qbb.html> (2012年2月15日にアクセス)
- 2) 厚生省保健医療局(編)：平成10年度喫煙と健康に関する実態調査報告書。厚生省, 東京, pp. 18-31, 2000.
- 3) コロムビア・ライト：生きてりゃこそ。国書刊行会, 東京, 1994.
- 4) 森岡 聖次, 畑中 孝之, 中川 利彦, 他：防煙メッセージの発信—たばこ病体験者の取り組み—。第18回日本禁煙推進医師歯科医師連盟学術総会抄録集, 日本禁煙推進医師歯科医師連盟和歌山県支部, 湯浅町, p. 27, 2009.
- 5) 加濃 正人(編)：タバコ病辞典。実践社, 蕨市, pp. 563 -565, 2004.
- 6) 玉川 和正(編)：人生のセイムスケール。2004以降更新中。(http://art-random.main.jp/samescale/077.html 2010年8月10日にアクセス)
(これ以外に、訃報ドットコム<http://fu-hou.com/>や訃報新聞<http://senmonshinbun.jyuluck-do.com/>などへもアクセスした)
- 7) 加濃 正人(編)：前掲書(5)に同じ)。 pp. 12-33, 2004.
- 8) 奥田 恭久：週刊タバコの正体100号の記録。禁煙科学, 1(3), 2007:25-28.
- 9) 柳川 洋, 田中 平三, 簗輪 眞澄, 他(監訳)：疫学辞典(第5版)。日本公衆衛生協会, 東京, pp. 77-78, 2010.
- 10) 日本医師会(訳)：医師とたばこ—医師・医師会はいま何をなすべきか—。日本医師会, 東京, pp. 43-57, 2002
- 11) 山中 進(編)：たばこバカ本。晋遊社, 東京, pp. 124-127, 2004.

- 12) Speizer FE, Tager IB: Epidemiology of chronic mucus hypersecretion and obstructive airways disease. *Epidemiol Review*, 1, 1979:124-142.
- 13) Doll R, Peto R, Wheatley K, et al.: Mortality in relation to smoking: 40 years' observations on male British doctors. *Br Med J*, 309 (6959), 1994:901-911.
- 14) 東山 明子: アスリートへの禁煙支援. 吉田 修(監修): 禁煙指導・支援者のための禁煙科学. 文光社, 東京, pp. 236-240, 2007.
- 15) Saito Y, Ueta I, Ogawa M, et al.: Miniaturized sample preparation needle: a versatile design for the rapid analysis of smoking-related compounds in hair and air samples. *J Pharm Biomed Anal*, 44(1), 2007:1-7.
- 16) Hirayama T: Non-smoking wives of heavy smokers have a higher risk of lung cancer. *Br Med J*, 282 (6259), 1981: 183-185.
- 17) 森岡 聖次, 重松 逸造: 日本の医療と疫学の役割—歴史的俯瞰—. 克誠堂出版, 東京, pp. 30-44, 2009.

A database of death causes on well-known smokers for smoking cessation programme.

Seiji Morioka*1, Yasuhisa Okuda*2

Affiliation:

*1: Department of smoking cessation, Minami-Wakayama Medical Centre Hospital

*2: Department of industrial design, Wakayama Technical High School

【Abstract】

Purpose: In order to promote smoking cessation, we made a database of death causes on smokers including celebrities.

Methods: Original information on each death was collected through major news papers from April 2003 together with internet information. Data verification was done by SM to examine each celebrity's articles and photographs. Each birth and death date was checked with encyclopaedias and Wikipedia. We delivered such information with special consideration of readers' and audience's background.

Results: A total of 516 deaths (birth year:1804-1971) including 35 women were edited by July 2010. Of these, 81 men and 10 women were not Asian race. The youngest deaths were 2 men at the age of 31, and the oldest 100 years old man. As for cause of deaths, 54 men and women were unknown at the moment. We edited another 181 people who died of tobacco-related diseases but their smoking status was not verified. Some 82% of men and 89% of women died of three major causes. Leading cause of deaths for both men and women was cancer, followed by cardiovascular second and respiratory third.

Conclusion: Deaths of celebrities are shocking and influential to promote tobacco cessation in communities. News papers are expected to edit smoking status and cause of deaths for celebrities. Famous people who stop smoking should be followed in terms of showing healthier life course.

Key words: database, tobacco-related diseases, celebrity, smoking cessation promotion